

いつの頃からかは忘れてしまったけれど、わたしはもうずっと、小さな浅い水たまりに両足をつけたまま暮らしている。

その水たまりは、わたしの行く先どこへでもついてまわり、歩くとたびにチャプチャプとかすかな音が、足元から立ち上ってくる。他のひとたちには聞こえないようだけれど、わたしには恥ずかしくてしかたがない。走ったり飛び跳ねたりすると、その音はいつそう大きくなるので、できるだけ静かに歩けるよう、たとえば電車に乗るときなどは、発車時刻よりも、うんと早めに家を出ることにしている。

ストッキングやパンプスを履いていても、すぐその下にはヒヤツとした水があるのだから、つま先から身体がじんわりと冷えてくる。夏場はいいようにも思えるけれど、皆が薄着になつて暑い暑いと汗を拭いているとき、いくら朝から夕方まで内勤だといつても、ひとりだけウールの膝掛けなど持ち歩いているのは、なんだか不自然な感じだ。たまに、「すごい冷え性なんです」と驚かれても、水たまりのせいで、などとは言わない。見えていないのならば、こちらからわざわざ知らせることもないからだ。見えないものは、この世に存在しないもの。もともと、わたしたちはそんなふう生きていくのではないか。

最高気温が三十六度を超える日が続いた一昨年八月、水たまりを熱で蒸発させられないものかと思い、わたしはカンカン照りのアスファルト道路のうえにじっと立つてみた。しばらくすると、足元の水は少しぬるくなっただけなのに、わたし自身ときたら、頭の芯がぼうつとして脈が速くなってきた。心臓を四方から圧迫されるような不安感に耐えきれず、わたしは努めて深く呼吸しながら道端の日陰をよるよる伝つと、クーラーのよく効いた喫茶店を探しだし、なんとかかその中へ転がり込んだ。注文したアイステイーを三杯、立

て続けに飲み干したところで、店の女の子が何かもの問いたげな目でわたしを見ているのに気づいたけれど、それでも四杯目を追加して頼まずにはいられなかった。

水たまりは依然として足裏にあった。さっきまでぬるい湯にも感じられていたのに、店の冷房に熱を奪われたのか、それはまた元の冷たさでフローリングの床を濡らしていた。

借りているアパートの畳は、もうぼろぼろになっている。当然だろう。濡れては乾き、濡れては乾き、一日に何度も繰り返しているのだから、芯まで腐っているに違いない。部屋全体に漂うジツトリ饅えた匂いを誤魔化すために、わたしは大型の芳香剤を使う。薄紫色の花柄が印刷されたプラスチック容器から拡散するラベンダーの香りは、人工的でストレートな強さを保ち続ける。結界を張るみたいに部屋の四隅に置いて、香りがなくなるまえに取り替える。前に比べると、より頻繁に取り替えるようになったのは、わたしの鼻が同じ香りに麻痺してしまったからかもしれない。

洋服にも髪にも、その香りはうつすらまとわりついているらしく、ときどきそのことを人から指摘される。気に入りの香水なのかと訊かれても、じつはトイレ用の安い合成香料なのだ。みっともなく答えられず、わたしは赤らんだ顔でうつむいてしまう。

悲しくないことはない。けれど、こんな体質だからと、わたしは諦めていた。

水たまりのうえで暮らしているのだからと、わたしは諦めていた。なにを、というわけでもないが、強いて言えば、何もかもを。

少なくとも、わたし以外のひとはみんな、乾いた地面を歩いている。雨の日を除いて。それだけで、わたしとはもう別世界の住人なのだった。わたしは、間違っこの世界に生まれ落ちてきたのだ。きつと、わたしが生まれるべきところは、海の中か河の中か、そうでなければ、常時、雨が降っているようなところなのだろう、この梅雨時のように。

テレビの天気予報では今日も終日、雨だと言っている。この一週間、降り続けだ。喜んでいられるひとはあまりないだろうが、わたしにはこの灰色の雨空が慕わしい。足元の水たまりが、ほかの水たまり

りにまぎれてしまつ、この湿気た天氣が、もつともつと続いて欲しかった。願わくば、永遠に。

そのひとに会つたのは、帰宅途中に立ち寄つたコンビニで雑誌を選んでるときだった。わたしの隣に立つて求職情報誌をめくっていた若い男性がレジへ向かいかけたとき、チャプンというかすかな水の音がしたのだった。

わたしは動いていない。だから、わたしの立てた音ではない。

わたしは振り向いて、彼の後ろ姿を追つた。レジで支払いをしている、その足元を見た。

小さな水たまりが、蛍光灯の光を跳ね返していた。

一瞬、息をのんで目を見張つたけれど、彼の長い脚の間から、黒っぽい傘の先がのぞいているのに気づいた。そこからは、しずくがまだ滴っている。外はひどい降りなのだから、濡れた傘をたたんでじつと持つていれば、そのしたには水滴がたまるわけだ。

なんとなく気落ちしながら、わたしは彼が出ていった自動ドアの向こうに目をやった。ガラス越しに、くすんだ緑色のジャケットが歩道の暗がり溶けていくのが見えた。

再び彼と会つたのは、その数日後、梅雨の合間によく晴れた日曜日だった。

湿気た部屋にいるのが嫌になり、近くの公園へ散歩に出たら、いくつもあるベンチのひとつに、見覚えのあるジャケットを着た青年が座っていた。何か雑誌を読んでいる。ふと顔をあげると、こちらを見た。目が合いそうになり、思わずうつむくと、わたしはその場を足早に通り過ぎようとした。

気をつけて歩かなかつたものだから、乾いたレンガ敷きの小道だというのにパシャパシャと軽い水音が立つた。心で舌打ちしながらそつと振り返ると、あの青年が少し唇をひらいて立ち上がり、黒い瞳を凝らして、わたしをじつと見つめている。

聞こえている？

わたしは何を考える間もなく走り出した。パシャパシャと、周りじゅうに聞こえるような水音を立てながら。

パシャパシャパシャッ。

わたしの足元で勢い良く水が跳ねる。のんびりと鳩にパンくずをやる母子にも、茶色い杖を握りしめたまま立ち止まって、彼女らを見守っている老人にも、その音は届いているはずなのに、誰もこちらを見ない。

聞こえていない、聞こえていない、誰にも聞こえていない、誰にも。

わたしは公園を走り抜けた。さつき見た黒い瞳を、まだ背中に貼りつかせたままで。

部屋に戻り、落ち着いてよく思い出してみると、あの青年がますます疑わしく感じられてきた。

コンビニでチャポンという水音を聞いたのは、仮に空耳だったとしてもいいけれど、あの足元の水たまりはいかにも変だった。ただか傘から流れ落ちた雨のしずくぐらいで、あのように輪郭のはっきりした水たまりが出来るものか？

わたしはさらに思い出す、頭の中で何度も呼び起こしたそのシーンをまたもう一度。あの公園での表情は、もしかしたら、己の同類を見つけた驚きをあらわしていたのでは？

西日のさすキッチンに座って、わたしはひとつため息をついた。

近づいて、はつきり訊いてみればよかったのだ。

(知らないひとに、いきなり?)

訊かなくてもいいから、彼の足元をしっかりと見ておけばよかったのだ。

(何に焦って逃げ出したのだろう、わたしは?)

あれこれ想像をめぐらせれば心がさわさわ波立ち、その度に足元の水たまりが深さを増していくような気がする。わたしは背を丸めて膝を抱えると、あごをそのうえにのせた。目を閉じると、身体を包むように這い上がってくる水の感触がして、胸から首、やがて頭まですっぽりくるまれてしまふ、羊水に浮かぶ胎児のよう。

この息苦しさ。

そして、相反する安らぎ。

わたしはゼリーみたいにぶるぶる震える水の繭の中に、何時間も閉じこもっていた。やがて夕闇に立ち上がると、とっぜん均衡を失

った繭はさあつと縮んで、再びわたしの足元に小さな水たまりをつくった。

わたしはあれから、勤め帰りには必ずコンビニに立ち寄る。たとえ買い物予定がなくても。

日曜日になると、晴れていても曇っていても、決まって公園へ出かける。

もしもあの青年に会えたなら、今度こそ確かめるのだ、「あなたも？」と。

梅雨が明け、陽光が日増しに力を帯びてきた。彼はもうジャケットなど着ていないだろう。それでも、会いさえすれば、わたしには彼がわかるに違いない。どんなに気をつけていても揺れる水音が、この耳に届くと同時に。

わたしはその時を待っている。いや、もうどうでもいいのかもしれない。

公園のベンチに座るわたしの指先からパンくずがこぼれるたび、鳩たちが先を争って、せわしげに首を振り振り集まる。やがて向こうから幼い子供がとことこ駆けてくると、鳩たちはいつせいに飛び立つ。翼の音が遠ざかり、レンガの床に撒かれたパンくずのうえには、人なつこく笑っている男の子がいる。半袖から、すべすべと柔らかな腕を差し出している。いつものことだから、お母さんもこちらに会釈すると、少し離れた木陰からゆつくりと歩いてくる。わたしは微笑み、男の子の小さな手のひらにパンくずをのせてやる。彼は喜んで、ぎこちなく腕を振りまわしながら空を仰ぎ、それをいっぺんに手放す。細かな白い点めがけて、鳩たちが、また舞い戻ってくる。翼をはたかせて着地し、男の子の周りをせかせかと取り巻く。

わたしは微笑んだまま、ぼんやりと思う、あの青年は今日も来ないだろう。いつかまた会えるだろうか。

心地よい風が吹いてきた。近頃わたしの水たまりは、少しずつ浅く、少しずつ小さくなっていくようだ。

了